

ふるさと三重の民話

楽しいお話、哀しいお話など、ふるさと三重に伝わる数多くの民話から9話をご紹介します。

※今回は過去に掲載した特集の中から抜粋し、再構成して制作しています。

※文体・漢字・仮名使いは原文を尊重し、掲載時に準じています。

イラスト：柚木美里

生けどられた雷公らいこう

【桑名市】

むかしから、桑名の町に、雷公らいこうさまがいやがっているところが2か所あります。

その一つは、あかすか赤須賀という漁夫の町で、もう一つは、にしかた西方という山手のところの町です。

というのは、ある日のこと、大雨とともに赤いからだの大きな雷公さまが、ズドンと、井戸へまっさかさまに落ちたんですよ。そこにいた人がびっくりして、なにごとかないかと井戸をのぞいてみると、

雷公さまが、「たすけてくれ」というて、泣いているんや。

「なにをいうか、人の家をなんども焼いているくせに」といって、井戸にふたをして、とじこめてしまいましたんや。さすがの雷公さまも、これには、「一本まいった」といって、井戸から出ようとしたが、出してくれないので、とうとう大声を出して、「もう、ここへは落ちやせんから、どうかふたをあけてください」と頼みましたんや。



「それではふたをあけてやるから、そのかわりなにか残して行け」といいますと、雷公さまは、「いま何一つもっていないから、背中につけている太鼓を井戸に入れておく」といいました。そしてまた、「いやになるくらい水を入れて行くから、この井戸は一年じゅう水がきれないようにするぞ」といいましたんや。

空へ飛んで行くときに、「きつとこの土地へは落ちませんから御安心のほどを」といって、かたく約束しました。

その井戸はいつの代でも水がきれた

ことはなく、また年じゅう太鼓の音が井戸の中からひびいて来るといことですぞな。

さて、もう一つの話はこういう話です。むかし、西方の高台の村に雷公さまが落ちたんや。

ある日のお昼ごろ、飯を食べていると、お宮の池でズドンと大きな音がするので、なにごとかないかと、おばあさんが腰をまげて見に行くと、雷公さまが苦しんでいるんや。

「これは、これは」とおばあさんが、たらいをもっていつて伏せたんや。さすがのあばれんぼうの雷公さまも、とうとう、「今後はもうこの土地へはけつて落ちやせんから、どうかたすけてください」といって、あやまったんや。そこでおばあさんは、えらいやつや、雷公さまを相手どつて、「ほんとか」と念をおしたんや。すると雷公さまが、「はっきりは約束できん」というもんやさかいに、おばあさんは大声を出して、「なにをいうか、それならもう一度、たらいの中へは

いつておれ」というたので、雷公さまはおどろいて、「ほんとにすまなかった」とあやまったんや。おばあさんが、「ゆるしてやるから、きつとこの西方の土地へは落ちやせんあ」といってやつたら、雷公さまは、「わかった、わかった」といって、空へ上つて行つたんや。

それからというもののは、

もうこの土地へは落ちんことにきまっているのや。

【すばりきみえ No.33】

平成2（1990）年2月から



ろく 六さんとシカの湯

【菰野町】

むかし、御在所山ござしよやまのふもとに、シムの六さんろくさんとよばれる、それは気のいい木こりがおった。

その日も、いつものように山で木をきって、「ぶくしよったところが、そこへ、「びきのシカがよろよろっとちかよってきた。見ると、足から血がながれ引きずっておる。猟師にでもうたれたのだろう。」

かわいそうにおもうた六さんは、「どれ見せてみい。」というともっていた手ぬぐいをさいて、ほうたいがわりにしばってやった。

「ほれ、これでもうだいじょうぶじゃ。」

シカは、くりくりした目で、じっと六さんを見ておったが、やがて、びよこんと頭をさげると、谷まのほうへとおりていった。

あくる日、六さんが、また、木をきって

おると、ひとりの猟師がいきをきらしてのぼってきた。

「このあたりでシカを見かけんかったかいのう。きのう、うったとき、たしかに手ごたえがあつたんやが。」

それをきいて、六さんは、「ははあ、きのうのシカのこつたな。」とおもうたが、なにくわぬ顔で、「さあて、シカは見んかったのう。まあ、しばらくやすんでいきなはれよ。」という、と、猟師は、「おかしいのう、たしかにこつちへにげたとおもうたが。」というて、そそくさと、もときた道をかえっていった。

それからというものの、六さんが山でしごとをしていると、いつも、そのシカがやってきて、びよんびよんとびはねてあそびまわる。六さんも、それがかわいくて、いつかすつかりシカとなかよしになった。

ところが、ある日のこと。六さんは、

きりたおした木に足をはさんで、大けがをしてしもうた。

「うう、いててて。」

ようやく、足を引っぱりだしたものの、「これじゃあ、とても、山はおりられんわい。こまつたのう。」と、いたむ足をさすりさすり、とほうにくれておると、そこへ、いつものシカがやってきていうた。

「このあいだのおれいがしとうございませす。どうぞ、わたしについてきてくださいまし。」

いわれるがままに、六さんは、シカにすぐるようにして、谷まへおりていった。やがて、うっそうとしげる木ぎのあいだに、小さな池があった。シカは、立ち



どまると、「この水に、足をつけて、きすってごらんさいまし。わたしも、この水で、きすがなおったんですよ。」というた。においも色もないが、すこしぬくいその水は、いたむ足をつけていると、うつとりと、なんとも気もちがいい。

それから二三日、六さんは、山ですごし、炭やき小屋にとまりながら、まい日、この水に足をひたしておった。すると、ふしぎなことに、足のいたみが、日一日とうすらいでゆき、しまいには、すつかり、なおってしもうた。

「こりゃあ、ふしぎな水じゃ。くすり湯じゃ。さっそく、里の衆しやうにも、しらせたらわい。」

六さんは、大よろこびで、山をおりていった。

こうして、シカのおしえてくれた、ふしぎな水は、湯ノ山温泉ゆのやまとよばれ、みんなに知られるようになった。そして、けがをした人や病気になる人たちが、かようようになったという。

「すばらしきみえ No.2」昭和59（1984）年12月から

鈴鹿峠の盗賊とハチ

【亀山市関町】

むかし、京^{きやう}のみやこから東国^{とうこく}へ旅をするには、鈴鹿峠^{きんろかとうげ}をこえていったもんや。この旅人をねろうて、鈴鹿峠には、よう山賊^{さんぞく}がでたそうな。

峠^{とうげ}のあたりは山はけわしいし、木がうっそうとしげって、昼でもうすぐらい。その岩かげや森の中から山賊^{さんぞく}たちが、いきなり、なん十人とむれをなしておそいかかるのやもん、警護^{けいご}のものがどれだけおつても、すぐにやられてしもた。街道を見まわる役人^{やくにん}たちがつかまえようにも、山賊^{さんぞく}たちにとって峠^{とうげ}のあたりは、じぶんの庭^{にわ}みたいなもんや。あつというまに雲^{うみ}をかすみと、にげられてしまうありさまやった。

そんなある日、鈴鹿峠^{きんろかとうげ}を商人^{しやうじん}の一行^{いっぎやう}がとおりかかった。なんでも京^{きやう}に大きな店^{みせ}をかまえる水銀商人^{すいぎんしやうじん}やつたげな。

水銀^{すいぎん}というのは、くすりにしたり、銅^{どう}のめっきやうるしの朱^{しゆ}ぬり、また女^{おんな}の人

いっぽう、山の上へにげのびた水銀商人^{すいぎんしやうじん}は、西^{にし}の空を見あげながら、「どうした、どうした。おそいぞ、おそいぞ。」と、さけんでおつた。と、どこからか、一匹^{ひとひき}の大きなハチがとんできて、そばの木^きのえだにとまったげな。

商人^{しやうじん}はそのハチに、まるで人間^{にやうじん}に話しかけるようにいうたんやて。「おそいぞ、おそいぞ。はよう、みんなをつれてきてくれ。」

すると、商人^{しやうじん}のことがわかったんやろか、ハチは、西^{にし}の空^{そら}たこうとんでいてしもた。

まもなく、西^{にし}の空^{そら}のはしに、ぽつんと小さな赤い点^{あかいでん}があらわれてな、赤い点^{あかいでん}は見るまにぐんぐんひろがって、大きな赤い雲^{あかいぐも}になり、むくむく、むくむく、こちらにむかってやってくる。

赤い雲^{あかいぐも}は、おびのようにつらなつて、だんだん下^{した}におりてきた。よう見ると、赤い雲^{あかいぐも}と見えたんは、なんとまあ、ハチの大群^{たいぐん}やないか。

さきほどの大きなハチがせんとうに

のおしろいなどにつかわれて、そのころは、えろう高価^{こうか}なものやった。

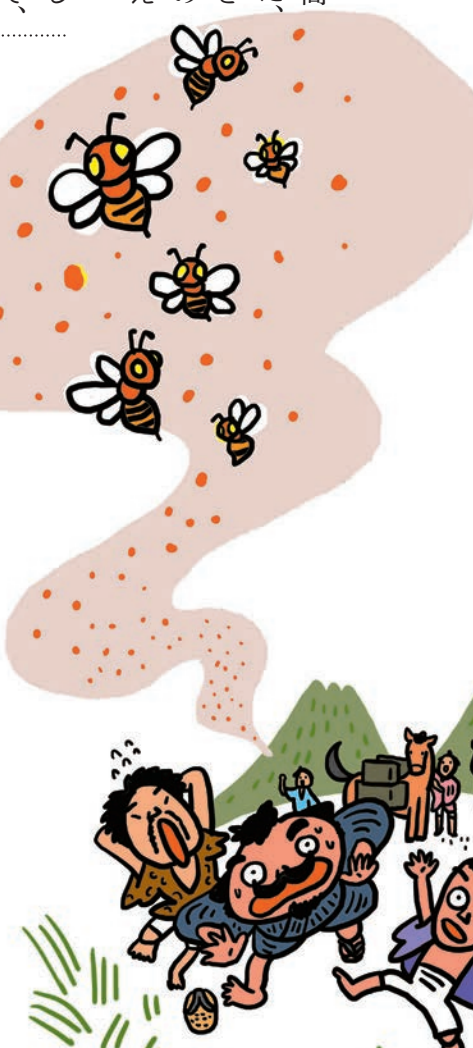
水銀商人^{すいぎんしやうじん}は、伊勢^{いせ}でしいれた水銀^{すいぎん}や、布^ふや米^{こめ}や、ほかの宝^{たから}ものもどつさりつんだ馬^{うま}を、百頭^{ひやくとう}あまりもつれておつた。けれど、ふしぎなことに、あれほど山賊^{さんぞく}がでるとうわさされておるのに、とももののは、ほんの二、三人しかおらん。シャラン、シャランと鈴^{すず}の音をひびかせながら、のんびりと峠道^{とうげみち}をのぼってやってきた。

峠^{とうげ}のてっぺんのがけに、まったいらですべすべした大きな一まい岩^{いわ}があつてな。山賊^{さんぞく}たちは草^{くさ}むらや木^きの上^{うへ}から、この岩^{いわ}にうつる旅人^{りょじん}を見て、えものがおおいから、とものかずはなん人かとききわめてから、おそいかかったものや。旅人^{りょじん}たちはその岩^{いわ}をかがみ岩^{いわ}とよんどった。いまものこつておるけどな。



さて、いつものようにかがみ岩^{かがみいわ}を見はつとつた山賊^{さんぞく}たちは、りっぱな身^みなり^{なり}の水銀商人^{すいぎんしやうじん}のすがたがうつしだされると、「なんと、ともはわずかで馬^{うま}の背^せには鈴^{すず}なりの金銀財宝^{きんぎんざいほう}じゃ。こんなえものはまたとないぞ。」と、大よろこび。わつと、かん声^{こゑ}をあげて岩^{いわ}かげからおどりでた。びっくりしたのはともものたちや。この人数^{にんずう}では、はむこうたところで、かなうはずがない。青^{あお}うなつてふるえておると、「みんな、荷^ににかまうでない。にげろつ。」と、水銀商人^{すいぎんしやうじん}みずから、山^{やま}をかけたのぼつてにげはじめた。

山賊^{さんぞく}は、それを見て、「あんなもん、ほつとけ、ほつとけ。」というて、馬^{うま}をうばい、荷^にをかついで、かくれ家^{かくれいへ}のある谷^やへとくだつていつてしもた。



こうして水銀商人^{すいぎんしやうじん}は、馬^{うま}や宝^{たから}ものをみんなとりかえし、いきようようと京^{きやう}へかえつていつたそうや。

京^{きやう}にある水銀商人^{すいぎんしやうじん}のやしきにはな、いつもふたをあけはなした大きな酒^{さけ}だる^{だる}がおいであつてなあ、ハチどもにすぎなだけのませておつたんやて。ハチどもは、その恩^{おん}をわすれずに、水銀商人^{すいぎんしやうじん}があぶない目^めにあうと、いそいでたすけにとんできたというわけや。

おかげで、水銀商人^{すいぎんしやうじん}は日本国^{にっぽんこく}じゅうどこへでも、しんばいなしにあきないにいたたもんで、店^{みせ}は、ますますさかえたというこや。

がらせて、みんな死^しんでしもた。

嘉蔵さんとおよしさん

【安芸郡】

むかし、あるところに嘉蔵^{かぞう}という男がおりました。村人たちが感心するほどの働き者でした。

山へ柴刈りに、畑へ仕事にと、毎日よく働いていました。

嘉蔵は何とかしてお金をためて、馬を買いたいというのが、かねてからのぞみでした。しかし、馬は一頭が五両もするのです。嘉蔵にはちよっと手が出ません。毎日毎日、「五両の金があればなあ」と口ずさんでいました。ときには夢に見ることさえありました。とにかく、心の中は馬のことです。

何年もかかって、嘉蔵はとうとう五両の金をためました。嘉蔵は喜びいさんで、馬市^{うまいち}へ出かけました。

ところが、馬市でよい馬が見つかりませんでした。何度さがしても、気に入る馬が一頭もないのです。すくすく帰りをたどっています

と、およしにばったりと出会いました。

「およしさん、およしさん、今なあ、馬市へ行った帰りだが、なんと良い馬がなくてなあ」といいますと、およしは、「わたしのところの赤馬^{あかうま}を売りましょうか」といいました。

「それなら、あの赤馬を売ってください。お金は五両しか持っていないのだが」といって、嘉蔵は、ぼんと五両の金をさしました。

夢にまで見た馬が手にはいったので、すから、嘉蔵はうれしくてたまりません。毎日毎日、得意になって村中を乗りまわしました。

ある日のこと、馬に乗った嘉蔵がおよしの家のところまで来ると、馬は嘉蔵をほたえって（みくびって）、パタリ止まったまま動きません。

よし、それならと、嘉蔵はおよしといっしょに馬に乗り、村はずれの竹藪の



ところまでやって来ました。

売られたことを怒っていた馬は、いきなり、およしを振り落としました。なん

と、およしは竹の切り株のトギス（トゲ）の上に落ちたのです。トギスは腰につきささり、およしは歩けなくなっていました。

村には、これという医者さんいません。さあたいへんです。

嘉蔵は痛がるおよしを馬に乗せ、わが家へつれて帰って来しました。

そして、家の中に風呂をすえつけ、いやがるおよしを一番風呂に入れてやりました。腰の傷はたちまちよくなりました。

ところで、この村では一番風呂には家の主人がはいるならわしでした。それが、およしを一番風呂に入れたのですから、たいへんなさわりになりました。

嘉蔵は、好きなおよしの傷をなおすために、一番風呂へ入れてやったのです。村人たちにいくらわけを話しても、なかなか聞いてくれません。

とうとう、嘉蔵は馬子^{まこ}に頼んで、「一番風呂はおよしさん、二番風呂は嘉蔵さん、三番風呂はわしじゃ」とそのわけを、村中にふれて歩いてもらいました。

ある日のこと、すっかりよくなったおよしは、お礼かたがた、赤いたすきを持って嘉蔵の家へやって来しました。嘉蔵はお返しに、白いたすきを渡しました。馬子^{うすき/あか/お}は浅黄^{うすき/あか}のたすきを渡しました。

さて、こんなことがはじまりとなって、この村では、嫁には赤だすきを、婿には白だすきを贈るようになりました。そして、たすきが切れると縁が切れるといわれています。

また、病人になった女の人は、一番風呂に入れるとすぐなおるといわれています。

そして、次のようなわらべうたが歌われるようになりました。



向いの嘉蔵さん 黄金五両拾って それで馬を買って およしを乗せて馬がほたえて およしが落ちて 医者と呼ばうか 御殿医者を呼ぶか 医者も御殿医者も 御無用なされ かどのまん中 すえ風呂たてて 一番風呂には およしを入れて 二番風呂には 嘉蔵さん入れて 三番風呂には 馬子^{まこ}入れて 赤いたすきは およしのたすき 白いたすきは 嘉蔵のたすき 浅黄^{うすき/あか}のたすきは 馬子のたすき それを結んで たすきにかけて それが切れたら 縁も切りよ 切りよ

「すばらしきみえ No.33」
平成2（1990）年2月から

狐を馬に乗せた話

【二志郡】

榊原の安子^{あこ}というところに、三九郎^{さんくろう}屋敷があります。

むかし、この屋敷に三九郎じいさんが住んでいました。ずいぶんのんきな人で、毎日毎日、裏山へ薪を取りに行っていました。

そして冬になると、馬の背に薪を積んでは、町へ売りに行くのでした。

ある日の夕方、榊原の平生^{ひろお}の坂まで来ると、狐がひよっと馬の背にとび乗って、歌を歌いだしました。

次の日も、また次の日も狐はあらわれて、ゆうゆうと歌っているのです。

三九郎じいさんは腹を立てて、「今日こそはしばってやるぞ」とどなりつけると、狐は姿をかくしてしまいました。

三九郎じいさんが、狐はもうどこかへ行ってしまったわいと思っていると、今度は馬の歩く前に立っては、大笑いするのです。

ようしと

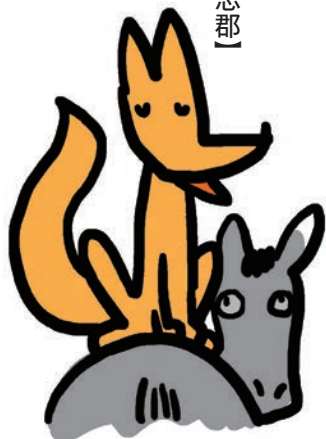
ばかり、三

九郎じいさ

んが狐をし

ばろうとすると、今度はまた馬の背の上に乗りました。馬は背中が重くなったので歩けなくなり、とうとう平生の長坂でへたばってしまいました。三九郎じいさんは馬に、「狐をしばりつけるからそおとしてください」といいました。狐は三九郎じいさんをうまくだまして、馬のまわりをとんだりはねたりしていました。が、とうとう、日が暮れてあたりは暗くなってきました。

三九郎じいさんは、暗くなって目の見えなくなった狐をしばらくして、いますと、また馬の背にとび乗りました。今度は馬が三九郎じいさんに、「狐が背中に乗ったから、今のうちにしばってください」といいました。三九郎じいさんは



すばやく狐にとびかかって、とうとうしばりあげてしまいました。

夜中になってやっと坂道を下り、三九郎じいさんは家に着きましたが、家の者たちはみんな寝ていて、何

度戸をたたいても返事がありません。

やっと三九郎じいさんが家の戸をあけて馬を入れようとすると、くくりつけたはずの狐の姿が見えません。なんと、狐は家の中にちゃんと坐っているではありませんか。

三九郎じいさんが、家の者たちに、「おーい、おーい」と何度も呼びかけても、返事をしません。そればかりか、狐が家の者の声で返事をしています。

追いかけると、仏壇の中へ姿をかくしてしまいました。

狐は仏さまに化けたので、どちらが本物の仏さまかわからなくなりました。

三九郎じいさんはしばらく考えていましたが、やがて、「うちの仏さまは御飯

で狐の鼻柱をたたきのばしてやったということです。

「すばらしきみえ №33」

平成2（1990）年2月から

をあげると、鼻をくくりくり動かして食べなさるありがたい仏さまだ」とひとりごとをいいながら、仏さまに御飯をさしあげました。

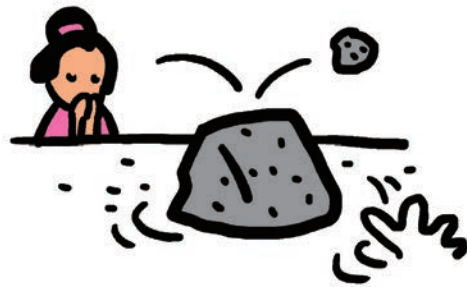
すると、狐が化けた仏さまは、鼻をくくりくり動かしました。このときとばかり、三九郎じいさんは、持っていた手斧



伊勢と大和の国分け伝説

【松阪市飯高町】

むかしむかしのこと、白馬に乗ったお伊勢さま(天照大神)が、宮前と赤桶の境にある峠においてになりました。そして、「誰かこの地の国境を知る者なきや」とおっしゃいました。



すると、水屋の森の中から、鹿に乗った白髪の翁が現れて出迎えました。お伊勢さまは、「あら珍らしや春日の神(天児屋根命)ではないか」と喜ばれ、「あなたとわたしの国との境を決めよう」と申されました。

は、「この境は少し疑わしい」と申されます。そして、そばにあった大石を川中に投げ入れて、波のとどまるところを国境にしようとお決めになりました。

は川上にみなぎり上り、その波の変化した様子から、それぞれの地名は加波の里、波瀬の里、舟戸の里となりました。波が高見山を超えると、お伊勢さまは「おつと過ぎたに、おつと過ぎたに」と手を打って喜ばれました。山向こうは杉谷(奈良県)、川下の波のとどまった所は波留と名付けられました。

滝をつくって流れ落ちたところは滝野の里と名付けられました。さらに水

お伊勢さまは両国の境を高見山とお決めに、春日の神は水屋の森にお戻

りになりました。ふたりの神が出逢われた峠は珍布峠と呼ばれています。

また、お伊勢さまが川中に投げ入れた

大石は、「礫石」と呼ばれ、

今も櫛田川の真ん中にたえずんでいます。

むかし、和歌山街道を往来した旅人は、

子授けの願をかけながら小

石をこの礫石に投げました。小石が当ると男の子が、当らなければ女の子が生まれると占ったといわれています。



波切の不動さん

【鳥羽市】



むかし、むかしのことや。神島^{かみしま}の南の浜に、一そうの舟が、ながれついた。村のものらがさわぎよつてみると、中には、たいそう品のよい姫がのつていなきつた。

「あんたは、いったい、どなたさんやな。」と、島のものがたずねると、姫は、「たつともうします。」というた。「それで、どこからおいでたんや。」わけあつて、人におわれております。どうかこの島にかくまつてもらえないでしょうか。」

たつ姫はそういうだけで、どこの国からきたとも、なぜおわれているのかも、いわん。

しらせをうけてやつてきた庄屋が、「ま、とにかく、わしの家でやすみなされや。」というて、家へあんなした。

たつ姫は庄屋の家の二かいのひとへやで、ねおきするようになったが、島のわかい男たちの気もちは、おちつかんようになった。

たつ姫のうつくしい顔をひと目みたい、ひとこと声かきたい……と、庄屋の家のかきねのそとを、いったりきたりする。それがいやで、姫は、へやにこもったきりで日をすごした。

春から夏になり、そして秋風がふきはじめたが、たつ姫は、いつこうに身の上を庄屋にかたろうとせん。

ある日、大あれのあらしがきた。海はくるいたつて、たか波が浜にのしあがる。漁の船はもちろんのこと、浜べの家いえまで、ひつさらつていきそうや。

だれもが、生きたこちもせん。庄屋の家のものが、ふと、つぶやいた。「二かいが、ふつとびやせんかのう。」

庄屋は、たつ姫のことを、はつとおもひだした。家のものはみな、下のひとへやにあつまつて、よりそつておるのに、たつ姫に声もかけてやらす、うっかりしてお

をうかがつたが、家の中からはもの音ひとつきこえてこん。

なにげなく井戸をのぞいた、ござ売りの目が、ぎろりとひかつた。井戸水に、へやの中でかがみをたてて、かみをすいている姫が、うつつておつたのや。

「ござ売りは、家の中にしのびこみ、二かいへかけあがつた。

寺からもどつた家のものが気づいたときは、むろん、たつ姫はごろされておつたし、ござ売りも島からにげてしもうていたから、どこかどういふものに、なぜごろされたのかわからなんだ。

その日から、庄屋の家の井戸水は、赤さび色ににごつて、のめんようになったそうや。

うつくしいたつ姫が、どこの国から、どんなわけでながされてきたのかは、とうとう、わからずじまいや。けどな、あら波をしずめた大小二幅の不動のかけじくは、太刀といっしょに庄屋の家にのこつた。

た。かわいそうなことをした……と、庄屋は二かいにあがつて、たつ姫をよんだ。ところがへんじがない。声もでんほどおそろしがつておつたのやろ、と庄屋は、しろうじのすきまから、中をのぞいた。

たつ姫は、ふるえておるどころか、へやのまん中にきちんとすわつて合掌しておつた。

ひぎのまえに、大小ふたつのかけじくをひろげ、その上に、まもり刀であらう太刀をおいて、なにやらとなえておるのや。かけじくの絵に目をやつて、庄屋は、いきをのんだ。えがかれているのは、不動のおすがたやつた。

たつ姫は身じろぎもせん。となえ声はひくいが、ゴウゴウというあらしの音の中で、しずかにつづく。たつ姫のまわりは、しんとしずまりかえつていて、庄屋の心も、その中へひきこまれていったんや。そして、庄屋がわれにかえつたとき、波の音も雨風の音も、ぴたりとやんでおつた。それからというもの、は、庄屋は、なんとかしてあの不動のかけじくを、もう一ど

神島のものたちは、かけじくと太刀を社にまつつて、いまもな、波切不動さん^{なみきりふどうさん}とよんでいる。

海のある日に、波切不動さんにおまいりすると、あら波もしずまると、島のものらは、しんじておるそうや。

「すばらしきみえ No.26 昭和63(1988)年12月から



島^{しま}の男たちは、あいかわらずたつ姫のうつくしさにあこがれて、話のたねにしていたから、波風をしずめた不動のかけじくのこと、ござ売りの耳にはいった。うつくしい姫……不動のかけじく……。こりやあもう、たつ姫にちがいないと、ござ売りは、ときのくるのをまつておつたわけや。

井戸ばたのうえ木のかげにひそんで、ござ売りは耳をすまし、二かいのようす

駒止延命地蔵

【伊賀市上野】

慶長年間（1596～1615）伊予から伊賀へ入国した藩主、藤堂高虎公が、馬に乗って伊賀地方を巡視していた折りのことです。当時「墓の谷」と呼ばれていた徳居町にさしかかると、溝に石橋がかかっておりました。その石橋を渡ろうというとき、高虎公の馬が動かなくなってしまうとき、お供の者が手綱を引っ張っても、ふしぎと一歩も進まないのです。



高虎公は、おかしなことがあるものだと思い、お供の者に石橋を調べさせました。すると、大きな石の裏にお地藏さんが刻まれていたのです。高虎公は、お地藏さんの持つふしぎな霊力が馬の進むのをとどめたのであろうと思い、掘り出させて、「駒止地蔵」として安置することにしました。その場所に幸福寺が選ばれました。

高虎公の行く手

にどのような災いが待ち受けていたのかはわかりませんが、戦国の世にあつて、「駒止地蔵」さんは、藩主を乗せた馬を止めるような霊力を持つというので、伊賀中の人々の信仰を集めたと伝わっております。

いつしか「顔のないお地藏さん」と呼ばれるようになった「駒止地蔵」さん、御丈170センチメートル、幅60センチメートルもある大きな石仏で、永禄3（1560）年に造られたと刻銘にあります。が、作者の名は見当たりません。

目も鼻も口もないというのは、信仰した人たちが撫でこするうちにすり減ってしまったのか、あるいはもともと彫られなかったのか、今となっては誰にもわかりません。



「すばらしきみえ No.92」平成11（1999）年10月から

孝子勘七こうし かんしち 【紀北町】

これはな、むかしむかし、おやまうら小山浦に住んでおった勘七という孝行息子の話さね。

勘七のまだ幼いころ、父親と兄の喜平治が死んでしまつてき、母親も病弱やつたから、ずいぶんと貧しい暮らしをしようた。それでも勘七は、一生懸命に働きながら、病いの母親をやさしく看病したんやな。

まだ父親が生きていたころや。ある日、勘七が、下駄をはき、草履を手にとって歩いてつきよる。それを見た者が、不思議に思うて聞いてみるとさね、「母はつまずくと悪いから草履をはいていけ、父は天氣がくずれそうだから下駄をはいていけ言いますよつてに、

しばらくすると、母親の病いが悪なつて、歩くこともできんようになつたんさ。勘七は、そばにいて看病したいけど、働かんことには薬を買うこと

とも、食べさせることもできん。それで、朝はまだ人が寝てるうちに起きてき、水くみやら、薪とりやら、飯の支度やらすませて、昼間は百姓仕事を休まずやつてさね、夜も休む間もなく母親の看病と縄ないに励んだんやな。

たゆまぬ勘七の孝行が、とうとう紀州の殿さまの耳に入つたんさ。殿さまは、母親と勘七が生きてるあいだ、毎年米十俵ずつ与えるゆう褒美ほうび(賞米)を与



下駄をはくと母の言いつけにそむき、草履だと父にそむくことになりました。ぬれてるところは下駄をはき、乾いているところは草履にはきかえるのです。」と答えたんやて。

また、こんなこともあつたわ。寒い冬でもミノしか着ておらん勘七に、着物をあげた者が



えたんやて。ところが、やがて母親が亡くなつてしまつと、勘七は、「賜米たまひをいただくのは心苦しいゆえ、御辞退させてください」と願ひ出たんやとさ。

殿さまは、勘七の誠実をほめたたえてな、藩の儒学者に命じて「孝子勘七伝」を書かせ、勘七に与えたんさ。

武士が力を持つておつたころの話よつてに、名もない田舎百姓がたいそな榮譽さね。

おつたんやけど、次の日になつても、勘七はミノしか着ておらん。どうしてかたずねるとさな、「あたたかい着物は、みな母に着せとります」ゆう返事がかえつてきたて。

のちに勘七は、両親の石塔をたて、菩提寺である長泉寺へ金二両を献納して、先祖の供養をしたゆうことや。

「すばらしきみえ No.92」平成11(1999)年10月から